令和５年度　　社会福祉法人・春生会　兒玉　邦彦

九州南部の古代中国“漢”の文化

1.灰汁で煮たもち米について（灰汁巻）

南九州に奇妙な食べ物があり、灰汁巻という。木のはいの灰汁汁にもち米を浸け、煮込んだものである。竹皮に包み、竹皮を割いて作ったひもで縛り、蒸しても膨張しにくい様にしておくと、餅を搗いた状態になり、冷めても柔らかく食べられる。ここ宮崎では黒砂糖入りの黄粉をつけて食する。形状は棒状の羊羹をさらに大きくし竹皮でくるんだものや、テトラポットのような粽型で同じく竹皮で包んだものがある。宮崎では羊羹型が多いように感じている。食い散らかしたようで恐縮だが、上の写真は粽型だ。灰汁の影響が少し少ないのか、色が薄く明るいようだが、味は間違いなく灰汁巻であった。

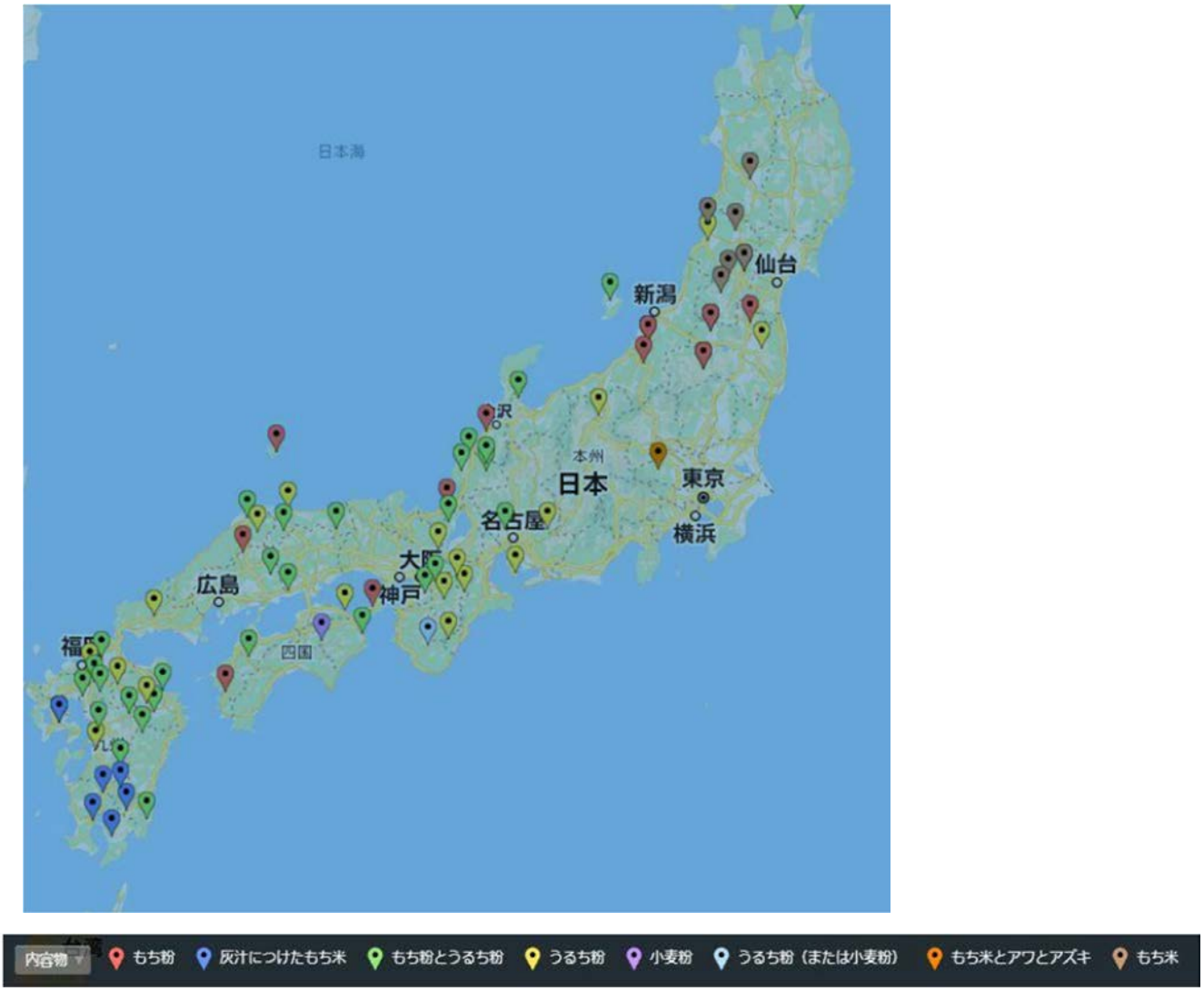
形に拘らず、灰汁汁で煮込んだもち米で作ったものを“灰汁巻”として調べると、南九州特有という情報が多かった。薩摩半島・大隅半島・宮崎南部・人吉だそうだ。

山形大・江頭氏の研究があるので掲載する。日本の食生活全集 2000（農文協 2000）よりの資料を整理したもので、南九州や長崎にある水色のマークが灰汁巻のあるところである。江頭氏によれば、山形にも灰汁巻があるそうなので、資料には記載がなく資料そのものの精度がそれほど高くないということでもある。

図ではわかりにくいが、南九州と長崎にある濃い目のマーク都合６点がそうである。

さて、冒頭の写真の種明かしをするなら、台湾の台北のレストランで食事中の写真である。ネット上で台湾に灰汁巻があるとのことで、職員旅行の折 JTB さんに無理を言って手配してもらった。間違いなく灰汁巻であったが、粽型で色が薄いように味も薄めであった。職員が気を利かせて、黒砂糖と白砂糖を黄粉にブレンドしたものを持参してくれたので、宮崎と同じように食べることができた。

現地の人には、黄粉が珍しいようで、じろじろと見られてしまった。この地では白砂糖で食するのが普通のようである。ネット情報によると、台湾だけでなく華僑のいるところでは灰汁巻が“漢菓子”といわれ食されることがあるとのことであった。



後漢の『風俗通義』（2 世紀末）に古い記載があり、粽は「角黍」とも呼び、菰葉（マコモ）の葉でもち米を包んで灰汁で煮たものと記載されており、同様の記述が周処（297 年没）の『風土記』にみられる。少なくともこれ以前に、灰汁巻が中国では食されていたことになる。

江頭氏の調査によると、以下のような文章がある。

これと同様のちまきは中国で 6 世紀に出版された「斉民要術」という本に紹介されおり、日本では平安時代にまとめられた百科事典ともいうべき「和名抄」という本に「朝比奈ちまき」の名で紹介されています。平安時代以前に中国から我が国に伝えられたものが南九州にだけ残されたようで、いわば貴重な文化遺産です。

朝比奈は、静岡の地名で、徳川家康がこの灰汁巻を好み、朝比奈粽ということで時々献上していたらしいが、現在は作っていないらしい。

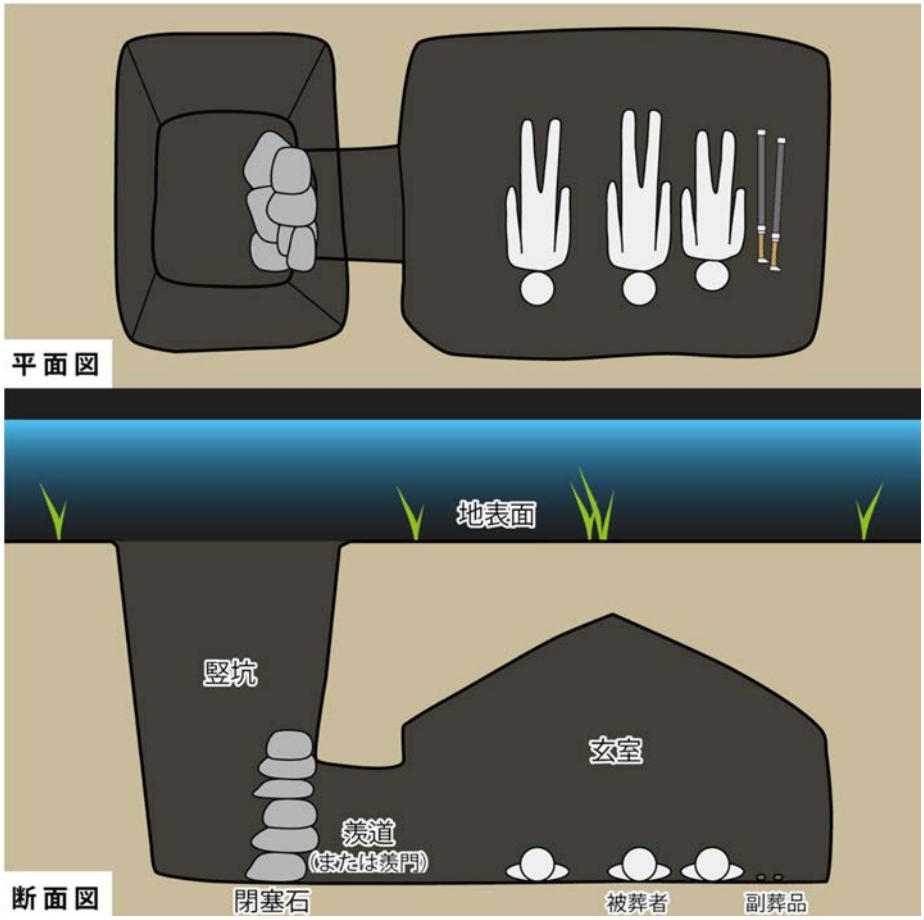
灰汁巻の伝播には、薩摩藩がかかわっていたという説もある。灰汁巻は腐敗しにくく乾燥しにくいため、兵糧として実に高性能で薩摩藩があっちこっちに持ち回っているうちに、広まったというのである。今となっては確かめがたい。

次の写真は灰汁巻である。棒状の灰汁巻が“式部の里”という生産者直売所で大量に売られていた。見上げれば、諸県の君牛諸井の故地東諸県郡本庄であり本庄川の川下は生目古墳群である。ともに地下式横穴墓の多いところである。

また、本庄川の川上には景行天皇と熊襲が戦った伝承の地がある。

灰汁巻

2. 地下式横穴墓について



地下式横穴墓の平面と断面

前段で、私が興味を持ったのは、人吉に灰汁巻があるということであった。人吉は盆地で古代においては、特に人の往来が困難で文化の伝播も難しかったのではないかと思う。周辺に灰汁巻があっても、人吉にないのが当然のように思えるのである。同じ現象が、地下式横穴墓においても現れる。南九州特有といわれている地下式横穴墓だが、大隅半島・大口・宮崎県南部・熊本の人吉盆地に分布す

るといわれている。ここでもポツンと一軒家のように人吉に検出されている。

灰汁巻も地下式横穴墓も、南九州部分を取り出せば非常に似ている。違いは、地下式横穴墓は薩摩半島にはないということである。薩摩藩が、大隅で灰汁巻を見てその兵糧としての機能を知り、薩摩に持って帰ったのではなかろうか。もしくは自ずとその文化が伝播したのか。

灰汁巻が、由来を忘れ去られて南九州特有のものとされていたように、地下式横穴墓はどうだろうか。

ここに、昭和 19 年 4 月の史跡名勝天然記念物調査報告　第 13 輯　六野原古墳調査報告　宮崎県史跡主事・主査　瀬之口　傳九郎　氏によるものがある。それによると“地下式古墳は決して九州南部に限られたものではない。喜田博士に依ると福岡県豊前国築上郡黒土村字堀立にありといひ、その他赤羽山の古墳、越前国（梅原博士)、東京小石川（上田三平考説）等にもあるとのことでその分布は本州地方にも案外多かるべきようである。”とある。また、地下式古墳(横穴墓)の章の冒頭に、“地下式古墳はそのほとんどすべてが、眺望に富める台地の上にある“とある。前述の上田三平考説も手元にある。上田三平著　東京御茶水に於いて発見せる地下式横穴の研究　日本史跡研究所　昭和 18 年 9 月　である。それによると、現在東京医科歯科大の基礎部分に地下式横穴が検出されていた。その後

東京市（都）内各地に同様の遺構が次々発見された。小石川区小日向台町 1-44　平井正弐氏宅地、早稲田大東伏見総合グランド内、市内王子区飛鳥山　公園の拡張工事中　人骨伸展葬、豊島区豊川町　女子大裏手　新道開墾中、市内麻布区桜田町満州国大使館構内、多摩　浅川駅　横山村大字下椚田字座間の高台御嶽神社境内等々である。日向・大隅辺りのものと同様であるとある。

ということにより、地下式横穴墓は、戦中・戦前においては関東・日向を問わず、日向大隅に濃く分布するものの全国的にも分布するものという認識があったものである。戦時中の混乱、戦後の復興により、それらが失われ、南九州特有のものと考えられているが、決してそうではなく幅広く各地に存在するのである。

古墳時代に急に増えた墓制として横穴墓がある。急峻な山の斜面に横穴を穿ちそこに遺骸を埋葬したものであるが、時期的にこれも古墳人が持ち込んだものだろう。中国では涯墓という。雨や台風、地面の湿気が高いと地下式横穴墓には向かない。道教では本来冥界は地中にあるのだが、稲作に従事すると、水でぬるぬるどべどべになった土を対象に生活することになり、墓室は地表より上にするようになったのだろう。華南で稲作に従事していた者にルーツを持った者が横穴墓を、華北の乾燥地にルーツをもつ者が地下式横穴墓を日本に持ち込んだように考えられる。

本来日本は、地下式横穴墓には不向きで、徐々に横穴墓に置き換わっていったのではないかと考えている。

3. 唱更国について

4 世紀初頭、大分は既に豊の国であった。南限は鹿児島だったかもしれない。景行天皇が高屋宮に居た時、現西都市の丹裳の小野で日向国と名付けた。大分より南側が日向になったのである。児湯・諸県・大隅等稲作可能地で米を搬送出そうなところで、貢物を要求できそうなところ以外は、あまり認識がなかったのではなかろうか。8 世紀に入り、日向南部で天皇家に反乱を繰り返す者たちがおり、統治に窮した天皇家は日向最南部の薩摩半島を分離して統治しようとした。隼人の乱である。国の名称は薩摩国である。この薩摩国は以前は唱更国といった。唱更は、漢代の徴兵で最前部の見張り役であった。ここで気になるのは、防人という和語もあり、夷守という和語もある。なぜ位置特定できない漢語の名称だったのであろうか。

4. 串間の玉壁について

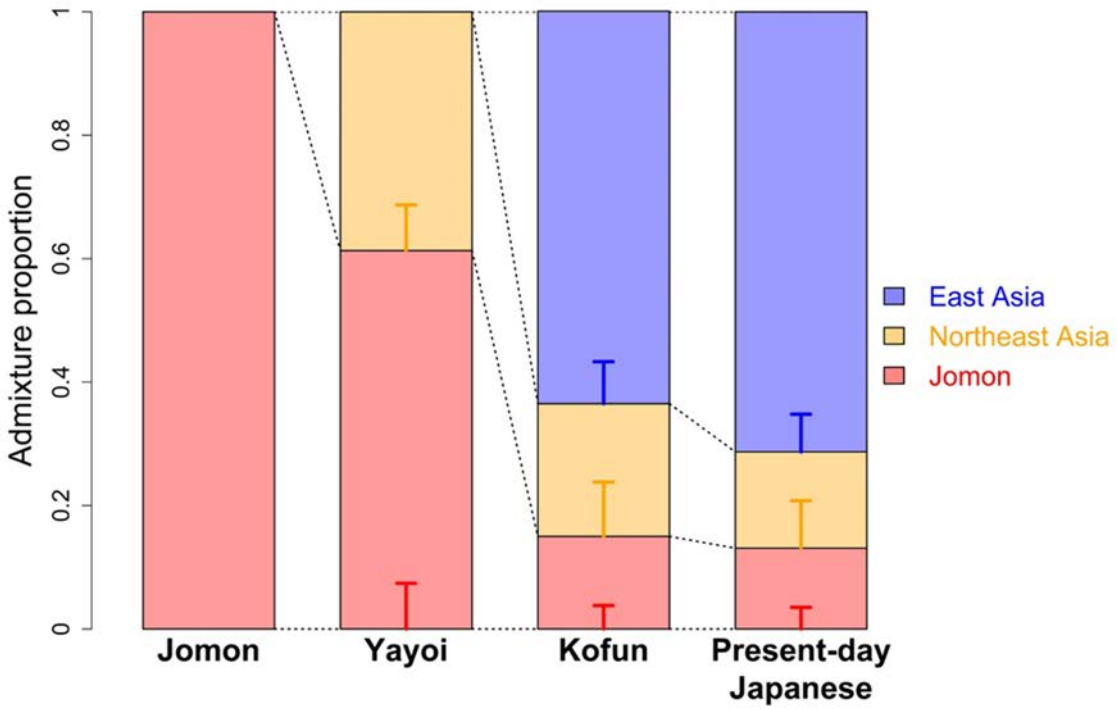
宮崎県串間市より出土したものとして玉璧がある。前漢の優れた玉壁で、越南国・衛氏朝鮮・月氏国等が下賜された可能性があり、それが串間に伝わったものであろう。越南国の第 2 代王の墓が見つかり、そこから串間と同等の玉壁が出土しているため、そこの玉壁である可能性は少し薄いのではないかと思う。月氏国は中国最西部でタリム盆地あたりにいたという。彼等が玉壁を下賜されても遠すぎて串間に来ることはないように思う。引算をすると衛氏朝鮮が残り、下賜されたものが朝鮮半島を南下し、串間に伝世した可能性が強く残る。いずれにせよ漢代の文化である。

5. 終わりに

南九州に漢の文化が伝わっていると考えている。古墳時代になると大量の中国系の人たち

が日本にやって来た。ゲノム分析の結果の表を見ると、古墳時代に於いて３分の２くらいは中国系の人である。つまり弥生人の２倍の古墳人が渡来し、人口が３倍になったようなものである。秦の滅亡に伴って、大量の人が朝鮮半島に流入し、漢代の動乱で多くの人が朝鮮の南部に流れたものと思う。朝鮮半島の動乱で、大挙して倭に渡来したのだろう。記紀に記録されたものは少数で、大半はなんの記録もなく各地に渡来しているのだろう。過去の人口推定にどれだけの信頼性があるかわからないが、AD２５０年頃の邪馬台国時代は５０～70万人 AD４００年頃は１５０万人という複数の人の推定があり、古墳時代の急増は確かなようだ。現代においては、更に中国系渡来人が増えている。これは、中国系渡来人の方が繁殖率が高いために、千数百年かけて増えたのだろうと思う。

地下式横穴墓の文化（中国では土洞墓という）を持って日本各地に渡来したが、南九州には、まとまって渡来したものである。このまとまりの北限が持田古墳群にある地下式横穴簿だろう。灰汁巻の北限を調べたら、川南にはあり都農にはない、東郷にはなく宇納間にはあるということだった。地下式横穴墓よりだいぶ北側に振れており、まだら模様になっているようだ。食文化は伝播しやすく消滅もしやすいということだろう。灰汁巻もまた地下式横穴墓を持って渡来した中国系の人々が持ってきたものではないかと考えている。



古代ゲノミクスで日本人集団の三者起源が明らかに　　より

串間の玉壁については、副葬してあったということである。何代も副葬の可能性があったのに、ここで副葬したということは、買ったり、貰ったり、取ったりしたものではなく伝世品をある思いを込めて副葬したものと思う。既に地下式横穴墓のことを述べたが、串間の眺望の良い台地に、地下式横穴墓を作り、組み立て式石棺を置き埋葬し、併せて 4～5 百年保持し続けた玉壁を、強い思いをもって副葬したのである。そんな事件があったのであろう。